

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18320010

研究課題名 (和文) 生命論の政治社会的・倫理的展開

研究課題名 (英文) Bio-politics and its ethical development

研究代表者

檜垣 立哉 (HIGAKI TATSUYA)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：70242071

研究成果の概要：

本研究は、生命論の飛躍的進歩を背景とし、なおかつ生命システムの現象としての人間という視点から社会や倫理性を捉える新しい倫理的社会的枠組みが現出していることにともない、それらがもつ思想的意義について根底的に考え、現代技術社会の展望について構想することを目指すものである。そのために、基本的にはフーコーの生政治学概念の具体的展開を図るため、ドゥルーズなど生の哲学との交錯を深めて検討した。その過程で、生権力の議論を中心とした文献の検討、社会学や美学、科学テクノロジー論を含む周辺領域の研究者との研究会などを積み上げた。その成果は、檜垣自身の論文、具体的には『思想』岩波書店への連載論文、『現代思想』への寄稿、そして、賭博や偶然性の概念とリスク社会との関連を扱った『賭博／偶然の哲学』河出書房新社等において提示した。また主に大学院生を中心とした研究会の成果は、共著としての論文集にまとめることになっている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	5,000,000	1,500,000	6,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：生命、倫理、現代フランス哲学、フーコー、ドゥルーズ、生権力

1. 研究開始当初の背景

研究の背景としては、研究代表者がこれまで行ってきた、現代フランス思想の、とりわけ生命システム論系の思想を中心にした研究の集積がある。以前の科研費の成果においても明確にしたように、代表者は、長年にわたり、一方では現代フランス思想に根付く生の哲学の領域を研究し、とりわけベルクソンからドゥルーズに繋がるラインについて多くの業績を残してきた。それと同時に、そこでの生に対する思考を、現代的な生物学、あるいはそこでの分子生物学的な生命論の現状とつなぎあわせ、さまざまな分野の研究者と交流することによって、現在の生の哲学の構築に努めてきた。またそれとともに、前述の生の哲学とも関連する生政治学的なフーコーの議論をも、哲学的な方向から検討してきた。今回は、そうした事態を背景に、生命システム論や、それが包括する環境性の議論とも繋がるかたちでの、生の倫理やその政治性の水準での議論を、哲学的な理論の枠組みのなかで描きだそうとするものである。

2. 研究の目的

研究の目的としては以下のことがあげられる。現在における生命論と倫理学、あるいは生命技術と政治学との研究といえば、現状の科学技術の進歩に対して、これまでの近代的価値観をもった倫理の枠内で、それにどう対応するかという議論しかなされず、実践的な、あるいは現実的な社会の要請がある以上やむをえないとはいえ、哲学的な観点から言えば、ある意味で根底的な問いかけを欠いた政治や倫理に対する言説しか提示されてこなかったといえる。その点、医学や脳死、臓器移植や環境について、さらには優生学やフェミニズム的な身体性などさまざまな観点からの倫理・政治学が実証性をもったデータとともに提示されてはおり、もちろんそれらは、それぞれの領域において具体的な重要性をもちながらも、逆にいえば、近代以降の科学技術の進展において、とりわけそこでの生命そのものへの知見の展開において、人間についての思考そのものが変更されることを折り込んだものとして形成されてはいない（あるいはそれを折り込むことがあたかも反動的なものであるかのような語られ方しかされない傾向がある）。本研究において目指されるのは、従来の倫理観的な基準を、あるいはそこでの政治哲学の言葉を繰り返すのみではなく、生命に関する思考の哲学的な厚味のなかで、生命としてのわれわれが模索すべき倫理や政治性の方向を、その生

命科学の水準に即して見いだしていくことである。本研究では、フーコーの生政治学のアイデア、そのさまざまな政治学的展開（アガンベン・ネグリ）、生の哲学の帰趨（ドゥルーズ）に、生命哲学の現状を連関させることにより、従来の手法によっては見いだしがたい倫理的・政治学的言説を紡ぎ出すことを目的とする。

3. 研究の方法

まずもって従来の生の哲学を中心とした現代フランス哲学研究を継続すること、この分野では、近年においてかなりの二次文献が内外において量産されており、そうした研究動向を踏まえることはとりあえず重要であると考えられる。そして第二には、生の哲学を、現状の生命論やそこでの倫理的・政治的な分野に繋げていく各領域の文献そのほかの収集検討を行うことが求められる。とりわけフーコーの生政治学のアイデアに触発されて展開されているいろいろな政治哲学的議論、そこでの優生学・フェミニズム・障害学なども含む広域的な生と生命の倫理を包括する方向性の諸検討、これらはとくに不可欠なものであると考えられる。

同時にこれらの研究を遂行するためには、さまざまな学際的領域における研究者間の相互検討が要求されると考えられる。そのために、科研費を中心とした研究会を、外部の研究者をお招きしての会としては、美学・政治学・社会学・アフォーダンス環境論を中心とした会を通算で4回にわたり開催した。

同時に、学内における大学院生を中心とする小規模の研究発表会も開催し、都合6回にわたり、社会学・人類学・社会テクノロジー論を中心とした研究会を開催した。科研で行われたこうした研究会の開催は今後も継続して行っていくつもりであるし、いまだ端緒にしかついでいない、優生学やフェミニズムの領域における展開は、なお深化させるかたちで行っていききたい。

4. 研究成果

上述で述べられているような、外部の研究者を招聘しての研究会自身はその最たる成果の事例であると考えられる。こうした研究会の、とりわけ大学院生を中心とした発表の成果は、勁草書房から生権力論の展開を主題とした共著書籍を刊行することにおいて、公開したいと考えている。

また研究成果としては、代表者檜垣の刊行したいいくつかの論文や書籍において、その一端が公開されている。現代フランス哲学研究

としては、岩波書店の『思想』に連載中の「ドゥルーズの時間論」、ベルクソン国際学会に発表したフランス語でのベルクソン研究に関する論考があげられる。この方面からは、共編著として平凡社から『ドゥルーズ／ガタリの現在』を刊行している。また生命科学とのつながりについては、青土社の『現代思想』に執筆の生命哲学に連関する諸論文がおもなものととして挙げられる。同時に、レヴィナスに関する生殖論などの発表している。そしてフーコーとリスク社会との連関については、『賭博／偶然の哲学』河出書房新社において、詳しく検討している。この書物のなかでは、賭博と現在性という事象について、具体的な賭博性の実例を考えるとともに、九鬼周造の偶然性の議論とドゥルーズとの連関、またフーコー的なリスク社会と自己統治論との関係と、生命的環境的な議論とのつながりを検討し、とりわけ政治哲学や生の世紀における倫理学に関するいくつかの考察を展開した。

なお科研の期間はすでに過ぎたあとであるが、『ドゥルーズ入門』をちくま書房から出版するとともに、今後雑誌媒体において、テクノロジーと身体、生と技術に関する雑誌連載を行う予定であり、それ自身、倫理と政治性を中心的な検討主題としたこの科研費の成果そのものとして実を結ぶものであると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計15件)

- ① Tatsuya HIGAKI, Le « tournant » dans l'interprétation deleuzienne de Bergson., in *Philosophia OSAKA* (No.4), ed.Osamu Uneno, Yukio Irie, Norihide Suto,and Yasuyuki Funaba, *Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, OSAKA UNIVERSTY*,2009,3 pp.47-54
- ② 檜垣立哉「生権力とセクシュアリティー」大阪大学グローバルCOEプログラムコンフリクトの人文科学国際研究教育拠点編『コンフリクトの人文科学』(第1巻)大阪大学出版会、2009,3,pp.123-133
- ③ 檜垣立哉「生成の歴史——ドゥルーズの時間論(四)——」『思想』(第3号 1019号)岩波書店、2009,3, pp.176-192
- ④ 檜垣立哉「生命と微分 西田と九鬼を巡るひとつの考察」日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』(第9号)昭和堂、2008,12, pp.37-51
- ⑤ 檜垣立哉「パラドックスとユーモアの哲学」『現代思想』(12月号 第36巻 15号)青土社、2008.11,pp.176-185
- ⑥ 檜垣立哉「細胞の自己 細胞の他者 ヴィータ・テクニカの哲学序章」『現代思想』(7月号 第36巻 8号)青土社、2008,6, pp.194-207
- ⑦ 檜垣立哉 (2008)「^{ヴォワイヤン}見者の時間——ドゥルーズの時間論(三)——」『思想』(第5号 1009号)岩波書店、2008.5,pp.149-165
- ⑧ 檜垣立哉「西田幾多郎と生の哲学」『西田哲学年報』(第4号)西田哲学会事務局、2007.7,pp.39-54
- ⑨ 檜垣立哉「永遠の現在——ドゥルーズの時間論(二)——」『思想』(第6号 998号)岩波書店、2007.6,pp.92-105
- ⑩ 檜垣立哉「生殖と他者——レヴィナスを巡って——」実存思想協会編『レヴィナスと実存思想』(実存思想論集XXII)理想社、2007.6,pp.29-50
- ⑪ 檜垣立哉「曖昧さの新たな倫理へ インターフェイス論によせて」『岐路に立つ人文科学』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書第1巻)、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」、2007.3, pp.169-182
- ⑫ 檜垣立哉「第三の時間について——ドゥル

ーズの時間論(一)——』『思想』(第2号 994号) 岩波書店、2007.2,pp.4-20

⑬ 檜垣立哉「顔の彼方の生」哲学会編『レヴィナス——ヘブライズムとヘレニズム——』(哲学雑誌第121巻 第793号)

有斐閣、2006.10pp.81-99

⑭ 檜垣立哉「身体の何が構築されるのか バトラー的構築主義への一考察」『現代思想現代思想』(10月臨時増刊号 第34巻 12号) 2006.9 青土社、pp.108-115

⑮ 檜垣立哉「ドゥルーズとメルロ＝ポンティ——潜在性の存在論と自然の哲学」『メルロ＝ポンティ研究』(第10号) メルロ＝ポンティ・サークル、2006.6,pp.19-32

[学会発表] (計4件)

①2009年3月 日仏哲学会シンポジウム「大正生命主義と生政治」同志社大学

②2008年10月 東アジアにおけるベルクソン シンポジウム *Le « tournant » dans l'interprétation deleuzienne de Bergson* (仏語) 法政大学

③2007年10月 創造的進化100年シンポジウム *Le vitalisme de Bergson et son contexte* (仏語) 京都大学

④2006年6月 西田哲学会 シンポジウム「西田幾多郎と生の哲学」大谷大学

[図書] (計8件)

単著

① 檜垣立哉『賭博／偶然の哲学』河出書房新社 2008.10

② 檜垣立哉『生と権力の哲学』ちくま新書 2006.5

共編著

③ 檜垣立哉「ベルクソン」鷲田清一編『哲学の歴史』(第12巻 実存・構造・他者 20世紀Ⅲ) 中央公論新社、2008.4,pp.47-122

④ 小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編(2008)『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社 2008.1 分担執筆

⑤ 檜垣立哉「行動すること／立ち止まること——実践的研究についての理論」小泉潤

二、志水宏吉編『実践的研究のすすめ』有斐閣、2007.9,pp.45-47

⑥ 檜垣立哉「現代思想の展望から——フロイト・ラカン・生命——」『精神分析とレトリック』「生命と記号」菅野盾樹編『レトリック論を学ぶ人のために』世界思潮社、2007.7, pp.194-218,

⑦ 木村敏、檜垣立哉『生命と現実 木村敏との対話』河出書房新社 2006.10

⑧ 檜垣立哉「ベルクソンとドゥルーズ」久米博、中田光雄、安孫子信編『ベルクソン読本』法政大学出版局、2006.5,pp.242-252

6. 研究組織

(1) 研究代表者

檜垣立哉 (HIGAKI TATSUYA)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：70242071

(2) 研究分担者 なし

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

研究者番号：